戦争と中学生のころ

福井辰次　鹿沼市

●敵前渡河（とか）訓練

県立鹿沼農商学校入学の昭和十七年４月、すでに大東亜戦争（太平洋戦争）は開戦されていて、教科科目には教練が組み込まれていた。学校には戦闘用具が入った銃器庫という倉庫があった。

上級生は教練に38型小銃を使っていたが、数に限りがあったので、我々は木銃といって、剣付け鉄砲の長さの樫の木で作ったものを訓練に使っていた。

訓練はいろいろなものがあったが、軍人勅諭の暗誦、突撃して敵兵殺傷、垂直の高さ３㍍の壁を駆け登る、伏せて銃を左手に、匍匐前進しながら右手で手りゅう弾を投げる、などだった。

やがて、兵員増強で召集令状が多くなり、農村の男子も多くが出征してしまった。食糧増産も人手が足りず、１年生の後半から農村への動員に駆り出されたが、日を追って動員の日数が多くなっていった。

６月ごろだったろうか、その合間を縫って野外訓練があった。黒川にかかる府中橋と朝日橋の中間に位置する「日消（後の日本造機）」のある西岸に敵兵がいると想定して、東岸から木銃をもって黒川を渡河する訓練だった。学生服に戦闘帽をかぶり、ゲートルを巻いて、膝ほどある黒川を横切り、敵陣めがけて突撃するのだが、何か、戦闘意識にぞくぞくしたものだ。今も脳裏をかすめる。

●学徒動員の思い出

開戦以来、中国戦線から兵士が移動して南方戦線が主力戦線になったが、２年生になると農家ばかりでなく、工場の従業員も徴兵されて、軍需品の生産にも支障が出てきたのだろう。学徒勤労動員令で、学生は全員工場に配属された。我々は日本造機に勤務することになった。

工場に入ってみると、従来の工員、徴用された町民、女学生とわれわれ、というように、雑多な身分の人々が集められた。技術を持った工員たち、町から来た徴用男女、なかには無骨な男や美声で歌の上手い少女、可憐な女学生もいた。ある男子は私が出世しても、自分のことを忘れないでくれ、と言って記念写真を撮った人もいる。

工員の中年の男性とは職場の数人と男体山登頂をしたことがある。日光駅までは国鉄の電車で行き、それからは乗り物もないので、男体山の頂上まで徒歩で登山した。なかでも、いろは坂を正面から一直線に四つん這いで登ったのは、今も記憶に懐かしい。

私が動員先で生産していたものは、戦闘機の注射ポンプといって、急降下した戦闘機が急上昇するときにエンジンに燃料を緊急補填するための50 cc程度の燃料ポンプだった。

靴はなく、足袋も思うに任せない時代だった。鹿沼の製材工場で出る端材を手ノコで細工し、鼻緒を付けた手製下駄が毎日の履物だった。当時の冬は30㌢程度に積もる雪がよく降ったものだ。

今市から動員された少女には、しばしば追いかけられたものだった。戦時中でも恋心はあったのだろう。逃げるも下駄、追う少女も下駄だった。府中橋に下駄の音が高らかに響いたのが懐かしい。

宇都宮が空襲に襲われた。遠い親戚が小袋町にあり、家業は豆腐屋だった。ある日、焼夷弾がばらまかれた。その辺の住民は駅構内の貨車の下をかいくぐり、線路を横断して駅東に逃げ、多くは助かった。

当時は命令で各戸に防空壕が掘られていた。豆腐屋の一家は防空壕に避難した。密集した家並みの中で、防空壕はたぶん軒下にでも掘ったのだろう、家屋は全焼して崩れ落ち、燃え盛る家屋が防空壕に覆いかぶさった。一

家は壕の中で蒸し焼きになってしまった。翌朝、父は焼け跡に行って、壕から出した一家を野火で火葬したと言った。

この宇都宮の空襲があって、次は鹿沼が空襲にあうだろうといううわさが広がった。我々が勤務する日本造機は古びたポンコツの鉄鋼機械が多かったが、それでも疎開することになった。末広町通り、今の福田屋百貨店の西の通りに工場内から引き出した古旋盤を木組みの三脚を作り、チェーンで釣り上げ、下に4㌧トラックを入れた。

当時、「油の一滴は、血の一滴」と言われた時代だったから、貨物自動車の燃料は、当然ない。木炭車か、アルコール燃料の車が一般的だ。幸いその車はアルコール燃料だったせいか、一発でエンジンがかかった。

旋盤1台しか運搬できない程度のボロトラックに同乗した。行く先は、板荷の手前の下遠部から、橋を渡って加園に抜ける山道の中間の平地林の中だったが、工場建屋も何もない山中に旋盤を下して帰った。それも数回で終わり、次の作業は板荷の山から伐採した杉の丸太を、旋盤を置いた山中に担いで運搬する仕事だった。

どうした経緯からだったのかわからないが、その頃になると私はクラス40人程度の長になっていた。土方の親分みたいなものだ。その下に2人の農部隊といわれる兵隊が配属されていた。夕刻になると、彼ら全員を小来川街道に集合させ、終礼をして解散させるのだったが、学徒動員にも一日の報酬が支給された。私は家に持ち帰り、父より高い給与に父を驚かせたものだった。しかし、それも長くは続かなかった。8月15日が来たのだった。

●鹿沼の空襲

6月のある日、小雨降る夜、宇都宮の爆撃を終えたと思われるB29の爆音が上空を横切った。来た！　いよいよ鹿沼空襲か。その瞬間バリバリいう音を立てて私の真上で火花が散った。焼夷弾だと瞬間わかった。「うわー、きれいだ」と言ったとたんに父に叱られた。帝國製麻（現在のテイセン㈱）を狙ったものだった。火の手が上がった。低く垂れこめた雲に火の手が赤く映る。まもなくもう一発、省線駅（現在のJR鹿沼駅）から新鹿沼を狙ったのか、省線駅を外れた焼夷弾は変電所付近の畑に落下、続いて府所の水田に落下、その線上、現在の東中学校の地にあった日本造機車両艤装工場に落下した。私たち一家は現在の宮司医院（府所町）の東手の水田のあぜ道に避難していたが、目前で水田に落下した焼夷弾が数発、水の中で炎を上げている。百㍍もない近距離だった。

日本造機車両艤装工場は高く燃え上がった。朝になって、焼夷弾の燃え殻を拾いに出かけて2本の焼夷弾のカラを拾ってきた。ながさ60㌢、太さ8㌢、鉄板の厚さ1㍉くらいの正六角形だったが、持っていると特高警察に捕まるということで、路上に出してしまった。

●疑似黄疸

彼の女房は家計を工面し、鹿沼は茂呂、石川の方に買い出しに行く。しかし買えるものはカボチャくらいだ。一家はカボチャばかりを食べたのだろうか、半年たったと思われる頃になると女房の顔が黄色くなった。「黄疸かもしれない、医者に行ってくる」と、近所の勧めでその女房は医者に行ったところが、結果は健康で、カボチャの食べ過ぎと判明した。

省線の鹿沼駅から宇都宮の方向、日光線の線路上を一路、茂呂、石川方面の買い出し部隊というのがあった。一行は6人から10人で一列に並んで背中にリュックを背負って歩く主婦の一連隊だ。そして午後3時ごろになると、鹿沼に戻ってくる。リュックには何が入っていたのだろう。法的に言えば、食糧管理法違反である。

昭和二十五年から遡ること3年半の間に、物価は百倍になった。超インフレだったから、

新円切り替えもあった。インフレ時に農家は、金銭より都市の主婦が嫁入りに持参した晴れ着などとの物々交換を優先したが、新円もけっこう貯まったようだ。農家の商法もしたたかだった。

どこの地方か知らないが、その新円を積み重ねて高さが一尺（約33㌢）になると、一尺祭りをやったという話もある。昭和二十二年の米俵一俵60円は、昭和二十七年には3千円になったのだから、日本国民は生活苦にさいなまれたことだろう。